

諸鈍シバヤ

前田達朗

はじめに

奄美・加計呂麻島の諸鈍集落の「諸鈍シバヤ」（以下シバヤ）を「演劇」とすることについては反論も予想される。後述するが集落の人々にとっては「神事」であり、日本へ帰属を求められた近世以降は「祭り」ともされる。またごく近似のものが対岸の奄美大島側の油井（ゆい）集落にも見られる²⁸が、そこでは「踊り」とされ、祭りの中での位置もことなる。またこれらを分けて考える意味は目的によって変わるであろう。

本稿でこれを「伝統的な演劇」とする理由はこうしたたとえば民俗学的な研究の視点ではなく、集落の人々が「演じる」ための努力を続けてきたからである。そこに現れる物語だけではなく伝える手段としての言語がシバヤを介在して伝承されている。踊り、振りを含めた音楽劇的な展開であるがために歌とその歌詞がその重要な手段であり、そしてこれをつないできた集落の人々にとってはこれらを体得することが義務であり、演ずることが許されることは名誉でもあり、そのためにモラルやレベルが維持されてきた。琉球列島全域に見られる「豊年祭」と同じに扱おうとする向き²⁹もあるが、諸鈍集落では別に豊年祭を行っている。この解釈が誤りであることを説明することでシバヤの「演劇」としての性格がよりわかりやすくなると思われる。

シバヤの概要

口承によると、源平の戦いに敗れた平資盛は、源氏の追討から逃れるために奄美大島に渡ってきたという。資盛は加計呂麻島の諸鈍に移城を築き、薄幸な一生を送った。彼が交流を深めるためにこの土地の人々に教えた演舞が、諸鈍シバヤの始まりといわれている。かつては 20 種余りあったという演目も今では半減し、11 演目が諸鈍シバヤ保存会によって伝承されている。現在は主に旧暦 9 月 9 日の集落行事の日に、資盛を祀る大屯神社の境内で踊られている。（瀬戸内町立郷土館・図書館ホームページ http://www.setouchi-lib.jp/assets_j5.html 斜字部筆者）

加計呂麻島もまた落人伝説がそこそこに見られる島であるが、このストーリーは実は明治以降に鹿児島から派遣された教員によって書かれたもの（かもしれない、的なもの）³⁰から始まったものである。近世以降日本、ヤマトとのつながりを常に探し求めて来た奄美の人々にとっては飛びつきたくなる言説だったはずだ。従って正確な起源はわからない。近代になって最初の記録とも言えるのは、「大奄美史」であって昇曙夢が 1937 年に見たシバヤのことが詳述されている。「沿革」と題してその当時の集落民からの聞き書きが続くが、演目や進行などは現在とほぼ同じであり少なくともこの時代にはいまの形ができあがっている

²⁸旧暦 8 月 15 日に「油井の豊年踊り」が開催される。演目・形態などは似ているが、メインイベントである相撲やそのほかの行事の中に組み込まれ、時間も短い。

²⁹ 小野重郎 1994。おそらくは小野は諸鈍集落での調査確認をしていない。「奉納相撲の余興」という油井集落でのものとの混同も見られる。

³⁰出典は執筆時現在不明であるが、記録が瀬戸内町立図書館に存在している

たことがわかる³¹。最大 20 前後あったとされる演目のうち、現在も上演される 11 の演目と上演順はかわっていない。³² そしてシバヤが豊年祭の演しものではなく、独立した演劇であるというもう一つの理由が、メンバーの合意のもと随時上演されるものであるということである。旧暦 9 月 9 日には必ず行われることからシバヤ保存会のメンバーの中にも「神事」と捉えている人がいるのだが、その舞台となる大屯（おおちゃん）神社とのつながりはそもそものもの³³ではなく、またシバヤは 19 世紀後半には興業化し、奄美群島の様々な場所で上演されていた。しかし明治 10 年頃、徳之島での興業で大損失を出し、存続の危機に陥った。それを島内の篤志家が資金援助することで 1920 年頃に再興したという。その後も著名人の来島や軍隊の駐留の際などに上演された記録がある。³⁴ 娯楽として芸能として成立し、単一の集落の行事ではなくなったのであった。

諸鈍シバヤの内容、演目の詳細については本稿の目的ではなく数多くの資料があるのでここでは立ち入らないが、ヤマトや中国、王朝時代の琉球とのつながり、汎太平洋的な仮面劇の影響などもいわれ、当時のはやりのものが入り入れられていき、時代を経ていろいろな変化があったこともうかがわれる。その意味での大きな転換点は 2011 もしくは 2010 年³⁵に取り入れられた、各演目の前にその内容や由来を説明する「口上」の日本語化である。少なくとも 20 年³⁶前からは、最初の演目である「サンバト」（三番叟と思われる）の前にだけ、挨拶となぜその日にシバヤを上演するのかについての説明、そして「サンバト」についてが、シマグチで語られ開演してきた。しかし諸鈍シバヤを目指しての観光客が増えたこと、地元住民にもシマグチを解する者が少数になったことなどを理由に「口上」がかつて語られていたものを翻訳して全ての演目について「説明」されることになった。形式としては以前に戻ったが、使われる言語が変わったということになる。ストーリー性があり娯楽として成立した経緯、さらには特定の日だけに上演されない³⁷、などの理由で琉球列島の他の民俗芸能とは一線を画すものであるといえよう。

シバヤ保存会

1976 年に国指定重要無形民族文化財に指定されたことから「保存会」が立ち上げられた。

³⁸ 現在の構成員は正メンバーである「青壮年団」が 18 名、中学生も含む『若手』が 9 名で、彼らがパフォーマーとしての中核となる。保存会とそれをめぐる集落の状況を聞き取

³¹ 町健次郎 2007

³² <http://www.syodon-spirit.com/> 国や行政のものよりも地元諸鈍小学校のサイトがシバヤについてわかりやすい

³³ この神社が資盛を祀ることも言説を「裏付けて」しまったが、戦前までは「ミヤー」と呼ばれる広場で上演されていた記録がある。

³⁴ 昇がみたシバヤも豊年祭を見に来た昇を歓迎するために上演されたものであり、この記述が「豊年祭の際の演しもの」という誤解につながった可能性がある。

³⁵ 関係者の証言が現在の時点で食い違っているため。

³⁶ 同上の事情による。書かれた記録がないため関係者の記憶による。

³⁷ たとえば 2017 年には「関西奄美会 100 周年記念式典」で上演された。

³⁸ 文化庁のサイトでは「保存芝居保存会」とされているが、シバヤと言う呼称が芝居の転訛であるかどうかはわかっておらず、現地ではシバヤとしか呼ばれない

りしたが情報源は記さない。諸鈍に限らないが集落の人間関係は強くかつ複雑であり、一つの発言が予想しない結果を招くことがある。匿名を条件に保存会の主要メンバーの一人に話を聞いた。

2017年は保存会にとってある意味大きな転換点であった。長年にわたり続いていた旧暦9月9日の公演が台風のため中止になったのだ。この日の公演が中止になった記録も記憶も集落にはなく決定までにはかなりの議論があった。もう一つはその公演の前に、30年以上「唄者」とよばれる劇の後ろで演奏される音楽のいわばリード・ボーカルをつとめてきた男性が急死したことである。彼は集落にとどまらず諸鈍シバヤの象徴でもあった。シマウタの名手でもあり即興の掛けあいでは敗れたことがなく、地域語シマグチの話者でもあった。それゆえにというべきか、彼の氏は長年にわたり誰もが危惧していた問題を現実のものとした、後継者の育成問題である。存在の大きさにそのことを誰も切り出せず、また同時に個人に依存していたともいえる。その後新体制が生まれ公演に向けての準備はひとまずされたが中止は本意では無かったが、救われたと感じたことも事実だという。彼抜きでの公演がうまくいくかどうかという不安はあったという。

週に一度、夜に集まっての練習は途絶えることなく続いている。次回の公演は行われるだろうが、全体も含めた伝承の問題、芸としての後継者問題は解決してないと考えられ、常に不安を保存会のメンバーは抱えている。

子どもシバヤ

諸鈍は加計呂麻島ではいまでも人口において最大の集落ではあるが、もちろん急激な少子高齢化を免れているわけではない。諸鈍には小中学校があるが、児童生徒の数はこの10年で半減、2017年には小学生12名、中学生2名である。これは周辺の集落から通学する生徒を含んでいる。諸鈍シバヤでは中学生や小学校の高学年の「男子」は特に10月の公演ではメインの出演者の一部である。かつては子どもたちの間ではいわば「レギュラー争い」があり、踊りやシマグチがうまいかどうか競われた。2000年代の初頭まではそういう状況だが、ここ数年は競うだけの数がない。また中学校を卒業すると諸鈍集落以外の子どもはシバヤに出演できなくなる。「諸鈍」の「男」が演じるもの、という掟がいまも生きている。

小学校や中学校で何度かシバヤを題材にしたものが練習され演じられてきたが、外で演じられることはなく学校の中にとどまっていた。子どもたちにはシバヤのことが伝えられ「伝統」や「格式」が強調されるが、その中には当然「諸鈍の男」以外は演じられないということも含まれることになる。何世紀も続いてきた諸鈍と他の集落の「格差」も感じられるはずである。

シバヤの近年の大きな変化の中で、演目の間に「余興」として演じられるようになったのが、諸鈍へき地保育所の園児による「子どもシバヤ」³⁹は確かに見ていてほほえましいものであるが、そういう大人たちの「事情」に遠いところにあることがもう一つの理由かも

³⁹ <https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20171014-00010003-nankainn-146> 2018/01/21
現在もとの南海日日新聞のサイトが

しれない。屈託無く楽しんでいる女の子や諸鈍集落以外の子どもたちは今のままだと将来「排除」されるのである。

諸鈍シバヤの言語伝承と今後

800年という由来や縁起については既述の通りだが、シバヤが文化財であることは間違いが無い。その中に「保存」(preserve)されることばやストーリーは貴重なものであるが、それゆえに変えられないことが数多くある。そしてそのことが今シバヤの在り方や今後の「縛り」になっていることは間違いない。後継者の問題は最大の課題であろう。また町を通じて支給される保存会への予算は年間7万円にすぎない。衣装や楽器の補修や保管、毎週の練習の経費などに明らかにたりないという。足りないということは保存会の会員の持ち出しが前提とされているということになる。こうした負担は高齢化もすすむ会員には大きい。唄者についても触れたが個人の努力や犠牲に依存していることは将来に不安をこのす。

「伝統」と諸鈍集落のプライド、それらのものがあいまって「諸鈍シバヤ」について諸鈍の人々の思いは複雑で、よそ者が簡単に評するようなものではないことは理解しつつも文化財としてのある種の「神格化」が行き過ぎることは今後の良い展開を期待できない。かつてあったようなシマの人々の娯楽としての在り方も忌避せず、そして変化を退化ととらえないことも必要だろう。